喰わず女房

むかしむかし、ある山奥に長次郎という炭焼きの夫婦が住んでいたど。長次郎夫婦は毎日山さ行って、炭を焼いては暮らしをたてていたんだど。ところが体の弱かった嫁さんは急に病気にかかって死んでしまったんだって。そこで二度目の嫁さんを探すことになったんだど。今度はまんまの喰わない働く嫁っこいねが、「まんまを喰わねで働く嫁っこ居ねが」って方々を探していたんだど。ある時若い綺麗な女が長次郎を尋ねてきて、「おらだばまんま喰わねで働くから、どうか嫁っこにしてけれ」と言って、頼んだんだど。長次郎は綺麗な女の上に、まんまも喰わねで働くと言うので、たいそう喜んで嫁っこにしたど。それからというもの、その女はまんま喰わずに朝から晩までせっせせっせと働き続け、何ぼ日も何ぼ日もまんま喰わないもんで、長次郎は不思議でならなかったんだと。そこで、ある日、山に仕事に行ってくるからと言って家を出て、屋根裏にのぼって家の様子をこっそり見ていたんだと。そしたら、驚いたことにその女は、長次郎が家を出るが早く大きな樽を出して、米をどっさり洗い、大きな釜に米を入れて、薪をどんどんくべて、まんまを炊き始めたんだと。出来たら、台所の戸板をはずして、

その上に頭ほども大きい握り飯を、戸板いっぱい作りはじめたんだと。そして、驚いたことに、頭の髪を真ん中から分けて、頭のてっぺんに大きな口があって、ばっくんばっくん、お手玉を取るように、みるみるうちに、まんまを食べ終わり、髪をしっかり結い直したんだと。一日中見ていた長次郎はあまりの驚きで体の具合が悪く、腰が抜けそうに。日暮れまで屋根裏にあがりっきり。心を落ちつけて降りてきて、「今かえったどぉー」っと、家の中に入ってきたど。そしたら前の怖い姿はどこえやら。綺麗な姿でいつものように、せっせと働いていたんだと。それから何日も過ぎたある日、長次郎は嫁さんに「二人で暮らすと体の具合が悪いので頼むから別れてくれ」って。そしたら、「別れるから、大きな樽をひとつオレにけでけれ」と言ったど。そして大きな樽をもらい、縄で背中に背負って、「オレどこ、起こしてけれ」。その時長次郎を樽の中にズドンと落として、山の奥へ奥へと走り出し、長次郎は逃げるにも逃げられないままに、山の奥へ奥へと走り出し、樽をドンと降ろしたとき、すばやく樽から逃げて、蓬と菖蒲の草の中に隠れて、その嫁さんは鬼の化け物でした。口は耳まで割れて、長次郎をたべようと、「ウオォー、ウオゥー」と大きな声で、あっちこっち捜したんだど。鬼は蓬と菖蒲の草の臭いが嫌いで長次郎はやっと助かったんだど。それからどこの家でも五月の節句に屋根の軒下に蓬を刺して鬼を近寄らせないようにしたんだど。

とっぴんぱらりのぷー。

仁平佐喜子（鶴形　65歳）

〈解説〉

東日本に広く分布する「喰わず女房」の話である。欲張り男が飯を食わない女房をもらったところ、その女房は実は化け物で、男の目を盗んでご飯を頭についた大きな口で食べていた。それを見ていた男が責めると、女房は男を樽に入れて遠いところで食べてしまおうと走り出した。途中で男は逃げだし、菖蒲と蓬の生い茂る藪に隠れて難を逃れることができた。菖蒲と蓬は魔よけの力があるとされ、五月五日の節供に軒先に刺したり、地面にたたきつけるなどの風習がこの地域にある。そういう民俗行事に結びついている。一年に一度の行事に由来を持たせる話となっている。